京都に劇場文化をつくる　**ハイライト vol.02**

highlight

ロームシアター京都
ROHM Theatre Kyoto

連載
highlight museum　熊谷亜莉沙 / はじめてのカンゲキ　多屋澄礼 /
わたしと京都会館　門川大作、髙田修、宮下喜久子、森口亮・三紀恵 /
okazaki today　加納俊輔

劇場と日常

「劇的」という言葉は、物や行為のはげしさ、非日常性を指す意味で、私たちの日常生活で使われています。そんな「劇」の場としての劇場が日常にあるとはどういうことなのでしょうか。
劇場から日常へ、日常から劇場へ。往き来する道はいかにしてつながっていくのか。ヒントを求めて、京都市立芸術大学長の鷲田清一さんにインタビューを行いました。続いて、京都の多様なアートスペースで実践を続ける4人の方による寄稿も。
オープンを間近に控えた「ロームシアター京都」は、日々の生活に溶け込む劇場を目指します。

特集『劇場と日常』

インタビュー　鷲田清一
わたしの「劇場と日常」イザベル・オリヴィエ / 髙田伸也 / 矢津吉隆 / 吉田由利香
「日常の中にある劇場とは」八角聡仁

highlight（ハイライト）とは、演劇や映画などの見せ場、最も明るいところを意味する言葉。観客と劇場をつなぐコミュニケーションペーパーとして、「劇場」の可能性と京都・岡崎地域の文化芸術資源に光を当てていきます。

写真／小川重雄　撮影場所／ロームシアター京都　メインホール客席

劇場と日常

interview

鷲田清一

京都の下京区に生まれた生粋の京都人。その日常的な感覚にも根ざした数々の著書や発言は、多くのヒントに満ちています。そんな鷲田清一さんが考える、劇場のあり方とはどんなものでしょう。日常生活から近い場所にありうる劇場のカタチを考えてみました。

写真／大島拓也

日常から地続きの劇場へ

—まずは、鷲田さんの劇場体験について教えてください。

鷲田：僕が学生の頃は、アングラが盛んだったので、小劇場やテント芝居だとかをよく観ていました。そう言うと、大きな劇場がスタートしようとしてるのに、差し障りあるかもしれませんが（笑）。その後、街の劇場、シアターの佇まいを実感したのは、僕がドイツにいた時です。

—30代前半でドイツへ留学されたんですね。

鷲田：そこで、たとえばミュンヘンなんかへ行くと、バーの数と変わらんくらいと言うと大げさだけど、街なかにふっと小劇場があったり、本屋さんの隣り、飲み屋の地下、いたるところに劇場があるような印象で。かつての京都におけるジャズ喫茶みたいな感じかな。だから、いまの日本では「劇場」って大がかりなイメージがあるけれども、僕の劇場観というのは、もう少しコンパクトなもの。

—劇場という言葉に構えてしまうところもありますけど、必ずしもそうじゃない。

鷲田：ドイツでは演劇文化もすごいですが、コンサートなんかでも、オペレッタとか、コンパクトな演奏会がたくさん開かれていて、なおかつ、大学には必ずコンサートホールと講堂を兼ねた施設があって、大学生は安い入場料で聴けました。市民の日常生活からそう遠くないところに、シアターの文化が当たり前のようにあるんです。でも、日本にも少し前まではそれに近い文化があったでしょ。

—どんなことでしょう。

鷲田：90年代前半だったでしょうか、京都市の都市の文化度を測るという調査に参加したことがあるんです。そこで、美術館や国宝、重要文化財の数を今さら調べてもつまらないと思ってね、尺度にしたのが、市民がどんな習い事をどれくらいやっているか。それを調べて、他の都市と比較したんです。

—文化度調査に習い事という視点は新鮮ですね。

鷲田：お茶、お能、三味線、お琴に、仕舞や謡の先生が週1回、家まで来られてという習い事も、京都はすごく多いし、子どもだったら習字にそろばんとかね。その調査の結果、京都は抜群の1位だったんです。2位が金沢かな。つまり、市民が教養として、自分でやるという文化があって、プロフェッショナルの芸を見るのも、“そっか、ああやったらうまいことできるんや”って参考にしたりして。生活と舞台で演じられるものとがもっと地続きだったんでしょうね。

—そう考えると、舞台上でのパフォーマンスから鑑賞までの距離はぐっと近く感じられます。

鷲田：しかも、日本舞踊やお茶を習っていると、普段の仕草も変わってくるでしょ。襖は立って開けないとか。そうやって、人の入れ替わりが少ない古い街では、おじいちゃん、おばあちゃんがやってたし、親も習ってたから、子どもの頃から何となしに見聞きしていたという体験が当たり前にありました。いまでは習い事が減ってきて、完全に鑑賞するだけという環境にあるから、劇場が特別なものに感じられるようになっているのかもしれない。

—日常に劇場を接続するためにも、まだまだ習い事には可能性がありますね。

鷲田：そうですね。それともうひとつ忘れてはいけないのが、絵を描いたり歌を歌ったり踊ったり、あるいは、ままごとをしたりすることって、誰に言われなくても、わざわざ習わせなくても、子どもは勝手にやるものでしょ。描く、奏でる、踊る、そういう行為は、文化のいちばんベーシックにあるもの。そういうことを忘れて、ステージの向こう側で演じられるものを見せていただく、聞かせていただくと考えてしまうと、身体から限りなく遠ざかってしまう。ある種の洗練はうまれてくるんでしょうけれど。

—実は、子どもがいちばん劇場に近いところにいるのかも。

鷲田：僕らの頃はそれがたとえばチャンバラごっこでした。はずかしい思い出ですが、チャンバラの漫画を読んでたら、ふと殺気を感じて、パッと切り捨てる場面がよくあって、殺気にルビで「さつき」と書いてある。だから、道を歩いてる時なんかに、「さつき」って叫んでから切るフリをしてたんだけど、それを見た大人はポカンとしてた。「さつき」って人の名前やろかって（笑）。

破格にしてプレイの場所だからこそ

—身近な劇場ということを考える一方で、ロームシアター京都のある岡崎は、美術館、図書館、勧業館、動物園といった文化施設が集まった、特別な文化ゾーンでもあります。

鷲田：岡崎って明治28年に内国勧業博覧会が開かれたところ。つまり、エクシビションの場なんですね。新しいもの、けったいなもの、あっと驚くようなものをお日さまの下に並べる、そういうことが許される独特な場所だったのでしょう。京都のひとってそういう破格のものが好きでしょ。

—「京都人のきわもの好き、新しもん好き」については、鷲田さんの著書『京都の平熱』でも書かれていました。

鷲田：そうですね、京都市の番組小学校なんてその典型で。よその町内には負けん、ええもんつくったろうというので、市民の寄付で明治初期に立派な校舎が市内の各地に建てられた。それがいまは、京都芸術センターやマンガミュージアムのような文化施設に転用されたりして。やっぱり京都には、“これでどや”という矜持みたいなものがあるのでしょう。大文字の送り火なんかもそういうところがあったと思う。山を削って字を書くって、なんて奇抜な発想…（笑）。傾（かぶ）くというのかな。言ってみれば「エクストラオーディナリー」。日常生活のルールやしきたりから外れた状態、「法外」「破格」、つまりとんでもないもの、普通の尺度では測れないもの。これは、芸術だけじゃなくて、学問も、宗教も、文化を担う大きな3つのカテゴリーはすべて、エクストラオーディナリーな営みなんですね。

—芸術、学問、宗教。いずれも京都に縁の深いものばかりでもありますね。

鷲田：そうそう。大学や宗教施設が街なかにたくさんある上に、芸者さんや修行僧のような人に街中では当たり前のように出会うし、祇園祭の豪奢な鉾も、町衆が飾りつけてるわけだから。そんなに構えなくても、エクストラオーディナリーな営みが身近にあるのが京都の街なんですね。だから、ロームシアター京都も、エクストラオーディナリーな場所であってほしい。他方で、最初に話したような市民生活とどう地続きにしていくか。隔離性と開放性というのかな、それをいかに共存させるかということがこれからの劇場、ロームシアター京都を考える上では必要なんでしょうね。

—劇場からの働きかけと同時に、市民の側から劇場を使いたおすくらいの気持ちがあってもいいのかもしれません。

鷲田：現代では、公共性は市民や会社が税金を払ったうえで、「だれのものでもない」ものとして上から下りてくるものとして受けとめられていますが、明治に民衆が番組小学校を造ったときには、私財と労力を投じて「みんなのもの」としてともに担うという感覚が色濃くありました。その感覚を私たちはもういちど取り戻していかなければならないと思います。その番組小学校には、作法室という畳の部屋があって、生徒が家庭科で使ったりもするけど、本来は、町内のひとが展示をしたり、寄り合いに使う部屋でもあったんですよ。そこに住み込みの守衛さんもおられてね、夜でも学校に入れました。

—学校内にコミュニティセンターのような場所があらかじめ組み込まれていたんですね。リスク管理の厳しい現在ではなかなか考えられないことです。

鷲田：していいこととしてはいけないことの幅が広ければ広いほど、自由な感じがするのですが、いまの社会はその両リミットの幅がすごく狭くなってる。だから、たいていのことは許されるという感じをどうやって担保するか。たとえば、僕が館長をやっているせんだいメディアテークというのは、壁のない建物で、誰もがどこへでも入れるんです。もちろん館長室なんてないから、僕らが会議してる横のテーブルで、高校生が受験勉強をしてたりする。会議で激論しているのがそれとなく聞こえるのも、それなりの勉強になっていると思う。今はどんな文化施設も、市民や子どもたちにどういうふうに開いていくか必死で考えてます。

—子どもが当たり前のように出入りしているかどうかは、ひとつの大きな指標になりそうです。

鷲田：英語に「プレイ」という言葉がありますが、演劇を上演するのも、演奏するのも、スポーツも、遊びも、賭け事もプレイで、シアターというのはプレイをする場でしょ、丁半博打はだめでしょうが（笑）。前号の誌面で、渡邊守章さんがフランス語の“jeu”について書かれていたのと同じことです。そのプレイの共通点は何か。放っておいても子どもがやるということ、そしてフィクションであることなんです。ルールや筋書きを設定して、それをやるという楽しみ。つまり、リアルの外側にもうひとつ別の規則を設定するわけだから、プレイもまたエクストラオーディナリーな営みなんですね。ついでにいえば、プレイの語源には「喝采する」「囃し立てる」という意味もある。いいプレイをするにはオーディエンスの存在も重要なんです。

—すべて話がつながってきました。

鷲田：エクストラオーディナリーな場所というのは同時に、プレイの場所でもある。だから、子どもがほんとうに“面白い！”と感じ、走り回ってるような場所じゃないと、プレイの根源にまで届いていない、表面的な劇場に留まってるということなんじゃない？ただ子ども向けのプログラムを組み込むという話ではなく、優れた作品は子どもたちをも揺さぶるということ。ロームシアター京都もそうあってほしいですね。

—はい、開館してからが楽しみです。

鷲田：公の施設だということでいろんな意見もあるでしょうが、芸術は国家よりはるかに古くから連綿と続いてきた人類史的な営みです。そういうエクストラオーディナリーなものの伝統に日常当たり前のように触れられることが、京都の活力につながってきたんだと思っています。

—ありがとうございます。最後に、鷲田さんの京都会館にまつわる思い出があれば教えてください。

鷲田：最初に京都会館に来たのはベンチャーズのライブ、中学生の頃でした。それで、最後が復活ザ・タイガースのコンサート。沢田研二さんのファンもみんないい年齢になってるんだけど、それがずっと立って声援を送っている姿に圧倒されました。

インタビュー・文／竹内厚

鷲田 清一　Kiyokazu Washida

1949年、京都生まれ。専門は哲学、倫理学。総長を務めた大阪大学では、大学院生がアートに学ぶコミュニケーションデザインセンター（CSCD）を立ち上げ、2013年から、宮城県のせんだいメディアテーク館長、2015年から京都市立芸術大学の学長を務める。また現在、古今東西の書物や記事、街のひと達のことばを自在に引用した連載「折々のことば」を朝日新聞で連載中。

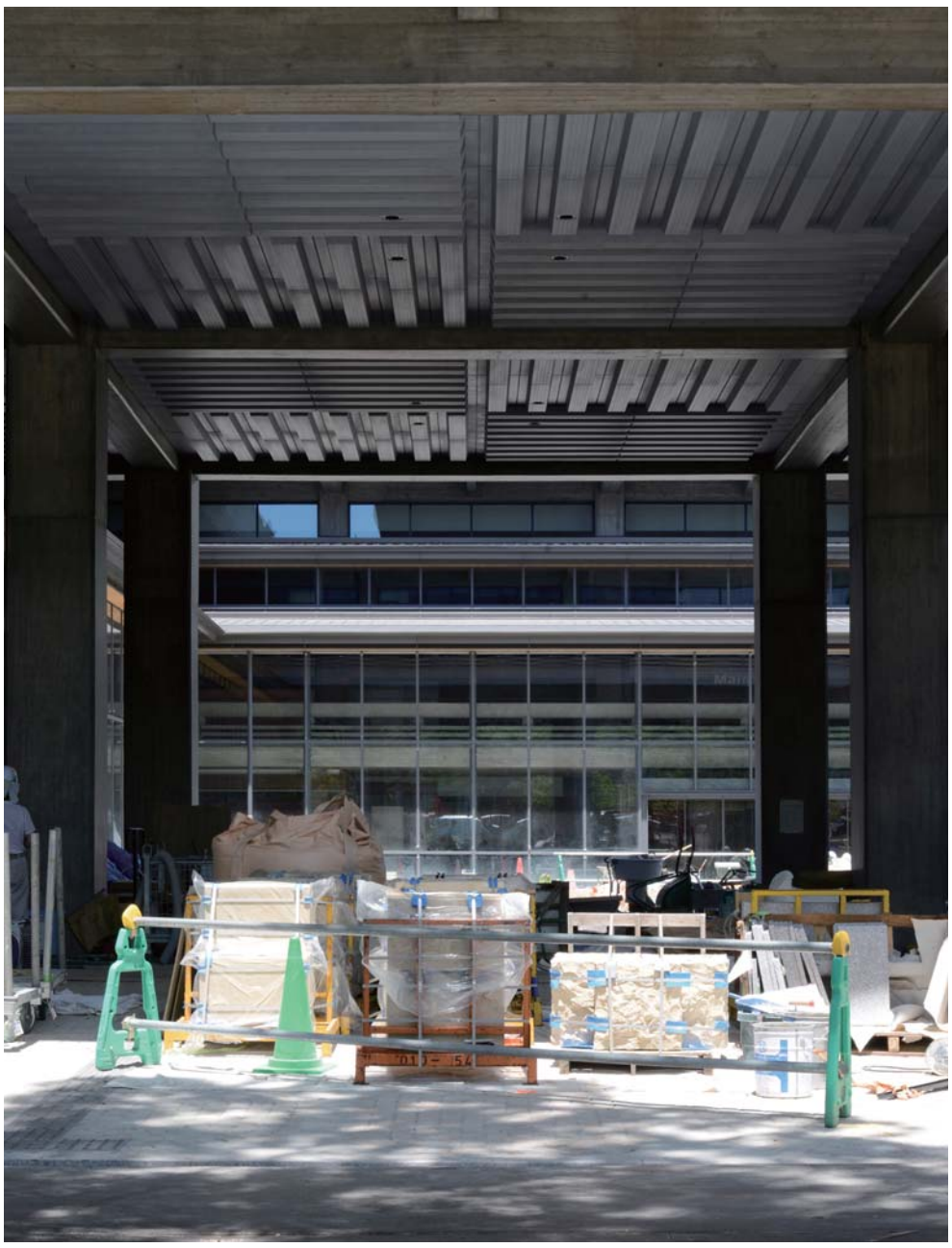


Photo by　鈴木 崇　Takashi Suzuki

わたしの「劇場と日常」

京都には、大小さまざま、個性豊かなアートスペースが数多くある。
それらのスペースのプロデュースを担う、若き実践者たちは京都のまち、
そして日常とどのように関わっているのだろう。

アンスティチュ・フランセ関西
（百万遍／文化センター）

イザベル・オリヴィエ Isabelle Olivier

アンスティチュ・フランセは、つねに多様な創造性を表現するために開かれた場所であろうとしています。そして私たちは、芸術の「民主化」という考えを心に抱いています。文化的な中心点にある芸術は、一部のエリート層や専門家たちのためにあるのではなく、あるいは単なる娯楽でもありません。誰の中にもある美的感覚や沸き起こる感情が、その人の“空を舞う星”を生み出すことが可能になるように、個人の創造性を花開かせ、あらゆる活動の中でそれを世に存在する技として表現することに力を与えるのです。私たちは交流やディスカッションへ我々の門戸を開くと同時に、新たな取り組みを歓迎することによって、舞台芸術の様々なプロジェクトを支援していきたいと思います。同時代の舞台芸術はとりわけ重要なものです。というのも、舞台芸術はこれらの考えを人々と共有するために強いメディアだからです。

1978年生まれ。2007年より日本へ。『100 METER FILM』映像制作アシスタント、赤坂国際法律会計事務所コンサルタント、『オール・ピスト東京』実行委員長を経て、2012年9月よりアンスティチュ・フランセ関西文化プログラム主任。

●京都市左京区吉田泉殿町8　http://www.institutfrancais.jp/kansai/

KYOTO ART HOSTEL kumagusuku
（四条大宮／アートホステル）

矢津 吉隆 Yoshitaka Yazu

例えば、ふとした作品との出会いから、思いがけずその場を離れられなくなることがあります。その作品世界にいつまでも留まり、ずっと奥底にまで到達したいと思う…。しかし、そう願っても実際には時間が許さない場合がほとんどです。京都アートホステルクマグスクは、展覧会のなかに宿泊することができ、一晩（もしくはそれ以上）という長い時間のなかで作品を鑑賞することができます。もちろん、時間の長短が作品の善し悪しを左右するわけではありませんが、その時間のなかには、泊まるという行為に付随する日常の営みが必然的に含まれます。作品世界と薄皮一枚隔てて、何気ない日常が顔を覗かせ、作品世界と日常が思わぬかたちで接続される。展覧会に宿泊するという体験の理想はそのような所にあるのではないでしょうか。クマグスクが京都において、日常の営みと美術のあらたな関係を築く場になることを願って、これからも様々な企画展を開催していきたいと考えています。

1980年大阪生まれ。美術家。京都市立芸術大学美術科彫刻専攻卒業。2006年までアーティストグループAntennaで活動した後、個人で京都を拠点に活動。2012年から宿泊型アートスペースkumagusukuのプロジェクトを始動。2015年1月に「KYOTO ART HOSTEL kumagusuku」をオープン。

●京都市中京区壬生馬場町37-3　http://kumagusuku.info/

カフェ・モンタージュ
（御所南／カフェ・小劇場）

高田 伸也 Shinya Takada

この小さなカフェを劇場とするために、心がけていることがあります。

まず、他の劇場での体験をもとに来てくれた人たちをがっかりさせないこと。そして逆に、ここでの体験をきっかけに、他の劇場にも通うことになる人を増やすこと。つまり、劇場から劇場へと渡り歩く日常を、一人でも多くの人に提供すること。そのためには、他の劇場で行われている魅力的な舞台にも注目しながら、その中でカフェ・モンタージュならではの公演というものを追求する以外にないと考えています。

定員40席。公演は年に80ほど。その全てを当劇場主催によって実現しています。大劇場とはまた違ったアーティストの側面、息遣いを感じながらの真剣勝負、その臨場感。そして終演後に開かれる参加自由のレセプション、そのサロンならでは寛ぎ。このコントラストが「カフェ・モンタージュでの1時間」です。

この街の一部としての「劇場」であるために、これからの舞台にさらに磨きをかけていきたいと思っています。

1974年京都生まれ。2003年にアンティーク楽器専門ショップ「Pankomedia」を設立。主にアンティークのピアノとフルートの修理に携わりながら、クラシック音楽のコンサートのプロデュースも手がける。2012年より「カフェ・モンタージュ」オーナー。

●京都市中京区五丁目239-1　http://www.cafe-montage.com/

京都みなみ会館
（西九条／映画館）

吉田 由利香 Yurika Yoshida

京都駅より少し南。東寺が眼前に広がる九条通り沿いに当館が生まれたのは、今から約50年前。半世紀以上にも渡り、この地で映画館をやっている。90年代からはオールナイト上映も頻繁に行い、今では当館の名物企画だ。オールナイト上映というのは、その名の通り、夜通し映画を上映する企画である。夜の23時頃から暗い劇場に押し込められ、大勢の人と共に、半ば夢うつつになりながらも同じものを観て、一緒に夜を明かすのだ。全ての上映が終わる頃には、まぶしい程の太陽が出迎えてくれる。終わった後、お客様達が目を細めながら「明るい…」と、口ぐちに言っているのは、とても微笑ましい光景だ。彼らは映画の中の物語から、太陽によって、グイッと強制的に現実に引き戻されているのだ。劇場の中で行われていたある種、幻想的な非日常の夜の記憶を持って、日常へと帰っていく彼らの姿を見送るのは、私の日常の中でささやかな喜びとなっている。

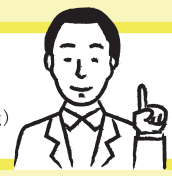
1988年京都生まれ。銅駝美術工芸高等学校にてテキスタイルデザインを学んだ後、京都造形芸術大学 映像舞台芸術学科にて映像制作を学ぶ。卒業後、「京都みなみ会館」に所属。映写・受付スタッフ、映画チラシデザインなどを担当し、2012年より館長に就任。番組編成や企画を行っている。

●京都市南区西九条東比永城町79　http://kyoto-minamikaikan.jp/

八角教授による解説！

日常の中にある劇場とは

八角 聡仁
（批評家／近畿大学教授、京都造形芸術大学舞台芸術研究センター主任研究員）



都市の日常に劇場がある、それは劇場が公共的＝パブリックに存在するということでしょう。ロームシアター京都が「公共劇場」であるというのは、たとえば、病院や学校が社会に存在するのと同じように劇場が存在しているということです。病院も学校も規模や経営形態はさまざまで、国や自治体が運営しているとは限りません。すべての人が等しく利用するわけでもありません。しかし、直接そのサービスを享受することのない人も含めて、それが社会に必要であるという合意が形成されています。つまり、いつでもそれを身近に利用できることが市民の基本的権利だという価値観が共有されているわけです。そして、施設の性質上、目先の利潤追求に委ねていては真に社会の利益にはならないという共通の了解の上で、そこに税金が使われています。

劇場文化が栄えたエリザベス朝時代のロンドンでは「パブリックシアター」が次々と設立されますが、それ以前には「プライベートシアター」が一般的でした。王様や貴族の庇護のもと、特定の身分や階級の人々の趣味嗜好に応じた上演が行われていたのです。それに対してパブリックシアターとは、社会の多様な構成員が集まり、共に楽しみ、共に考える場です。当時のロンドンは人口が急増して、社会が流動化する中で、人々が異質な他者と出会い、多様な文化を知るためのメディアとして劇場が大きな公共的役割を果たしていました。現在も世界中で上演されつづけているシェイクスピアの作品は、まさにそうした都市の劇場文化から生まれてきました。

もちろん公共劇場の役割は時代とともに変化します。現代社会では、劇場は贅沢で手間のかかる文化となり、その存在意義が根本から問いなおされています。京都という世界的な都市で、歴史的、国際的な視点をもって独自の劇場文化を発信しようとするロームシアター京都の挑戦は、新たな「公共」を創出するという重大な使命を担っているといえるでしょう。

聞き手／橋本裕介（ロームシアター京都）

highlight MUSEUM

大学の先生が推薦者となって、いま京都から生まれている才能に光を当てます。
第1回は、椿昇先生のご推薦、京都造形芸術大学大学院を修了したばかりの熊谷亜莉沙さんの作品をご紹介します。

The World

H163×W163×D3.5cm　パネル、キャンバス／油彩

Comment：

私の芸術表現は、はじめから最後までたった一人での作業の積み重ねです。舞台芸術はその意味では真逆であると感じます。だからこそ強く惹かれ、たびたび劇場に足を運び、舞台芸術を全身で浴びるということの豊かさと重要性を感じています。仮に絵画が静としたら、舞台は空間ごと一つの動です。それぞれの素晴らしさを作家と鑑賞者の立場で経験していけたらと思います。

熊谷 亜莉沙　Arisa Kumagai

1991年、大阪生まれ。2015年3月に、京都造形芸術大学大学院 総合造形領域卒業。
豪奢さ、派手さ、セクシャリティにまつわる強い憧れとその衰退への考察をもとに制作された本シリーズで、修了制作展では優秀賞を受賞した。16年にシンガポールでの個展を予定。

推薦者：

椿 昇（京都造形芸術大学 美術工芸学科学科長）

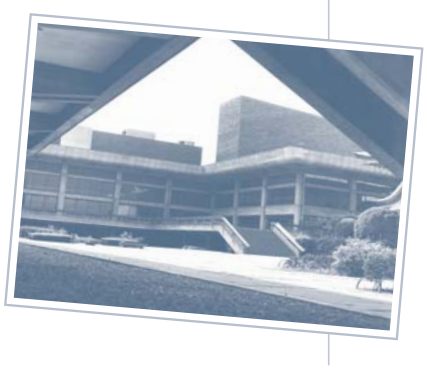
ヨーロッパ絵画の伝統的な手法を用いた美術史的批評性と、現代のジェンダー問題を融合させ新境地を開きました。久々に登場した本格派として今後の活躍が期待されます。

わたしと京都会館

―京都会館の50年を振り返る―

1960　1970　1980

京都会館
オープン！



市民やアーティスト、京都会館に関わってきた人々の証言と資料をもとに、京都会館がこれまで歩んできた時間を紡ぎなおします。京都会館にまつわる思い出をお持ちの方、ぜひお話を聞かせてください。

門川 大作 京都市長

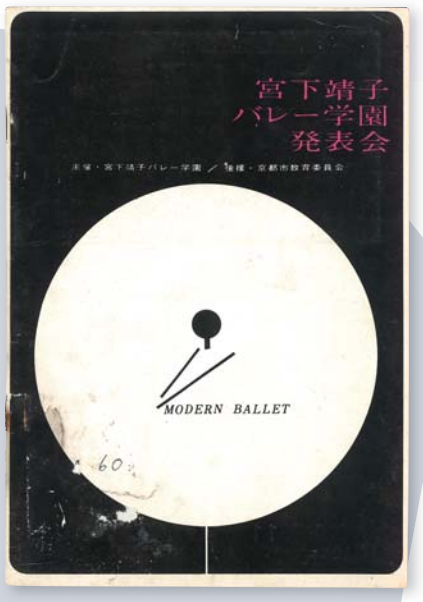
Daisaku Kadokawa

1950年京都市生まれ。京都市教育長を経て、2008年2月より第26代京都市長に就任。現在2期目。市民と共に汗する「共汗」と市民の視点に立った政策の「融合」をキーワードに、全国のモデルとなる市政改革を進める。

昭和35年4月29日、京都会館は市民の皆様の大きな期待を背負って、京都・岡崎の地に誕生しました。ちょうど私が小学生の頃です。京都で新しい音楽の動きも盛んになり、私も、京都市交響楽団が開催する子ども向けの音楽会などにはよく行ったものです。京都の子どもたちにとって、京都会館にハレの舞台を観に行くこと、あるいはその舞台に立つことは特別な体験でした。

また、京都市長として、自治記念式典をはじめとする様々な催しで多くの方々とお会いし、貴重なお話をお聴かせいただく機会を得たり、市民の皆様が日頃の練習の成果を熱心に発表される舞台を鑑賞させていただいたりと、京都会館は私にとっても大切な思い出がいっぱい詰まった特別な場所です。

この歴史を未来へと引き継いでいくため、来年1月10日、京都会館は「ロームシアター京都」として生まれ変わります。これまで以上に多くの国内外の皆様に愛され、市民の皆様の生活の中に息づいたホールとして大きく育っていくことを心から願っています。



宮下バレエは、1960年の京都会館開館より2012年まで、半世紀以上にわたり、公演、発表会をその第一ホールで開催して参りました。「京都にバレエ文化を根付かせたい」という両親より引き継いだ思いにより、第一ホールで踊ることそのものが私たちのステータスでもありました。

なかでも一番の思い出は、1985年の『くるみ割り人形』です。ハンス・マイスター氏に振付を依頼し、衣裳・装置も外国人スタッフの力を借り上演したこと。この舞台は、総合芸術として大きなご評価をいただき、宮下バレエの一つの財産となりました。

私自身10歳のときに、宮下バレエ学園の第5回発表会『白鳥の湖』で「四羽の白鳥」を踊ったことを覚えています。また後年、わたしの人生の転機となったのも京都会館でした。その日、第一ホールでは、東京バレエ団が「まりも」という作品を上演しており、それを観て、大きな刺激を受けた私は上京。バレエ団の門をたたき入団を果たしたのでした。会館がとりもつ縁だったと思います。

ロームシアター京都が、これからも若い多くのバレリーナにとって「夢の舞台」であり続けてくださることを願ってやみません。

宮下 喜久子 さん

Kikuko Miyashita

宮下バレエ団を創設した宮下貢介、靖子のもとに生まれる。4歳よりバレエの基礎を学び、15歳で東京バレエ団に入団。現在は、宮下靖子バレエ団長・学園長、芸術監督を務める。

REPORT はじめてのカンゲキ －多屋澄礼さんが市民寄席へ！－

実際に劇場へと足を運んで、率直な感想をいただきます。今回は、京都へと移住されたライターでDJの多屋澄礼さんです。

写真／沖本明

ステージの上には高座がひとつ。目の前でどんな光景が展開されていくのだろうか? 期待に胸をふくらませながら噺家さんが登場するのを待つ。いざ今日の一番手である桂ちきんさんが高座にあがると、自分が予想していた噺家さんのイメージよりも若くて、フレッシュなことに意表を突かれてしまいました。街角で交わされる世間話のように、親しみやすい話し方であったり、お客さんも巻き込んだ笑いのおかげで会場が一体となっていく。落語の知識がほとんどない自分は、ちゃんと楽しめるかなと少し緊張していたけれど、エンターテイナーな噺家さんたちのおかげで、自然と他のお客さんの笑いのリズムに自分も乗ることができたのはとても嬉しく感じました。仕草や言葉といったすごくシンプルなツールをつかって人を笑わせたり、楽しませる。お客さんはその言葉から想像力を膨らませ、ストーリーを楽しむ。ただ受け身ではなく、自分の想像力に笑いの加減がゆだねられているのが、いつも足を運んでいる映画やコンサートとは違っていて、私にとっては背筋がピンとなるような、新鮮な感覚でした。でも何より、皆で笑うのって楽しい！日常の中にそんな体験がもっと増えたら素敵だし、その機会はこんな身近にあることを知れたのが一番の収穫でした。

ロームシアター京都　オープニング・プレ事業『第326回 市民寄席』
2015.7.7（火）／京都芸術センター　講堂

笑福亭鶴光「らくだ」／蝶六改メ桂花団治「豊竹屋」／桂団朝「座長の涙」／桂ちきん「犬の目」
＊ロームシアター京都のオープン後、『市民寄席』はロームシアター京都へと会場を移し開催されます。

多屋 澄礼 Sumire Taya

ライター、イラストレーター、DJ。1985年、東京生まれ。主宰する人気ショップ「Violet And Claire」は現在、京都・下鴨に移転オープン。著書に『New Kyoto　京都おしゃれローカルガイド』『フィメール・コンプレックス（彼女が音楽を選んだ理由）』。

1990

2000

2010

2012年
京都会館
閉館

2016

1月10日(日)
ロームシアター京都
オープン！

髙田 修 さん

Osamu Takada

京都会館の開館時から技術スタッフとして運営に携わる。現在は、京都市職員を定年退職、自分で組み立てた自転車でのサイクリングやカヌーでの川下りを趣味にしているが、最近はしんどくなってきたそう。

高島屋の南にあった映画館「パレス劇場」で映写技師をしていたのですが、京都会館のオープン1週間前から、京都市文化観光局技術課電機係の職員として京都会館で働くことになりました。そりゃあ、みんな一生懸命でした。仕事が終わった後によく同僚と反省会を行い、ホール音響の系統図がボロボロになったのを覚えています。当時、ポピュラー音楽のコンサートなどの催しは、会館スタッフで音響、照明、舞台のすべてを行っていたため、主催者、出演者、スタッフに一体感がありました。

肝を冷やしたこともたくさんあります。VIPの方々が日本全国から参加した集会で、自分が発注した懸垂紙（演題と演者を書いた紙）がなぜか本番近くになっても到着せず、大騒動になりました。看板屋が開演時間を間違えてたんです。当時は携帯電話もなく、関係する場所を探し回って、開演1時間前に比叡山の比叡平で見つけました（笑）。

静と動が入り混じった変化のある仕事だったせいか、勤務した37年間はあっという間でした。退職した今でも京都会館のことを時折思い出し、会館に勤められた幸せを感じています。

亮さん：中2の時に、京都会館であった南野陽子さんのコンサートに行ったのが人生初のコンサートだったんで、鮮明に覚えています。伏見から友達と大冒険という感じで行って、会場で大合唱しました。

三紀恵さん：私は中山美穂さんが大好きで、京都会館へ観に行きました。まだ小学5年、10歳だったので、ステージがあまりよく見えなくて、客席の上に立って、係員の人に何回も怒られましたね。学生時代はファッションショーもよく見に行きました。

亮さん：2005年にお店を開いて、京都会館との関わりが増えました。京都会館でポップスのコンサートがあると、お店に来るお客さんが喜んでくれるようにコンサートと連動したBGMやメニューを考えたりしていました。お客さんの会話を聞くのも楽しかったなあ。

三紀恵さん：楽屋に配達したこともあったよね。

亮さん：仲間たちと岡崎で音楽のイベントをやってるんですが、ロームシアター京都とも一緒になって、まち全体を活性化できたらなと思っています。

森口 亮 さん・三紀恵 さん

Makoto Moriguchi & Mikie Moriguchi

ロームシアター京都の西側にあるハンバーガーショップ「58DINER」を夫婦で経営。亮さんは、岡崎の飲食店が連携して開催している食と音楽のイベント「岡崎World Music Fes」の中心メンバーでもある。

「わたしと京都会館」の思い出～第二次募集開始～

highlightでは、引き続きみなさんの京都会館にまつわる思い出のエピソードと資料を募集します！

募集概要 コンサートチケットやパンフレット、京都会館で撮影した記念写真など、思い出の資料や写真、エピソードをお寄せください。highlight紙面や劇場の公式WEBサイトなどでご紹介させていただきます。応募の詳細は、京都市内施設で配布中のチラシまたは公式WEBサイト（http://rohmtheatrekyoto.jp/）をご確認ください。

受付期間 2015年9月15日（火）～12月25日（金）

PICK UP

ロームシアター京都　オープニング・プレ事業
京都コンサートホール開館20周年記念

高校生のための オペラ音楽セレクション

2015.10.22（木）14:00 開演

［会場］京都コンサートホール　大ホール
［チケット］全席指定（税込）　高校生・大学生・短大生・専門学生2,000円、一般3,000円（残席ある場合のみ。要問合）
［プログラム］ビゼー／歌劇『カルメン』　前奏曲・ハバネラ・闘牛士・行進曲と合唱、
シュトラウスⅡ／喜歌劇『こうもり』　序曲・夜会は手招く・親しい仲間よ、ほか
［指揮］三澤洋史

［主催］京都市、ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）
［共催］新国立劇場／［助成］公益財団法人 ローム ミュージック ファンデーション／［協賛］ローム株式会社

◇お問合せ　京都コンサートホール Tel.075-711-3231

5つのおすすめPoint

- 『カルメン』や『椿姫』など、有名なオペラ作品からオペラの名シーンを彩るアリア・合唱曲をセレクト。
- 京都市交響楽団が、日本のオペラ界をリードする新国立劇場合唱団、京都府合唱連盟メンバーと初共演。
- 総勢150人を超える圧巻のステージ！
- オペラ案内人として「世界一受けたい授業」でも人気の青島広志を迎え、オペラ初心者にもその楽しみ方をわかりやすくご紹介。
- 充実の内容で、学生は2,000円という超お得な鑑賞プログラム！

ロームシアター京都とは

2016年1月10日、50余年にわたり親しまれた京都会館がリニューアルオープンします。京都市に本社を置くローム株式会社と京都市が50年間の命名権契約を結び、「ロームシアター京都」という新しい名を得て、京都における文化芸術拠点として人々の創造と交流に資する“劇場文化”を京都につくり出していきます。

お問合せ **ロームシアター京都 開設準備室**
〒606-8342　京都市左京区岡崎最勝寺町13
TEL:075-746-3355
Fax:075-746-3366
http://rohmtheatrekyoto.jp/

highlight vol.02
編集ディレクション：竹内厚
アートディレクション・デザイン：株式会社フィールド
編集：ロームシアター京都（橋本裕介、武田知也、長野夏織）
発行：ロームシアター京都 開設準備室
（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）
発行日：2015年9月13日

禁・無断転載

okazaki today

アーティストが切り取った、思いがけない京都・岡崎の横顔をご紹介

「竹中家の工場跡」｜2015年7月13日

提供：奈良文化財研究所

1890年、京都復興の起爆剤として進められた琵琶湖疏水が竣工。岡崎のまちには疏水を分岐させた水路が多く作られ、水力を活かす町工場ができた。戦前「水車の竹中」と呼ばれ、精麦工場を営んでいた竹中家は、工場の一部と水車水路のかたちを今も残す。2011年、京都市「京都を彩る建物や庭園」に選定され、今後の保存、改修方法を思案中という家主の話を聞きながら、加納俊輔ならではの手法で撮影が行われた。

加納 俊輔　Shunsuke Kano

1983年、大阪生まれ。現在、京都在住。2010年 京都嵯峨芸術大学大学院芸術研究科修了。身近な風景をとらえた写真や身の回りにある物を使用し、かけ離れたイメージや立体物と掛け合わせる手法で制作。さまざまな要素や意味が混沌と混じり合う作品は、「見る」ことを捉え直す試みである。